

瑞穂遺跡(第7・8次調査)

大野城市教育委員会



写真1 弥生時代の墓地

瑞穂遺跡は、牛頸川北岸の台地上に位置し、瑞穂町一帯に広がる弥生時代から古墳時代の遺跡です。今回は瑞穂公園再整備に伴い平成23・24年度に実施した第7・8次調査について紹介します。

調査地周辺は、昭和30年代まで丘状の高まりがあり、集落の共同墓地として利用されていました。周辺ではかつて甕棺が出土したと伝えられていましたが、実態は不明でした。

調査の結果、弥生時代前期前半から弥生時代後期末(約2,200年前～1,800年前)にかけての甕棺墓・土壙墓を主体とした墓地、古墳時代前期(約1,750年前)の古墳3基、近世から現代にかけての墓地が発見されました。

写真1は弥生時代の墓地の様子です。墓の種類は、土壙墓、木棺墓、石蓋土壙墓、箱式石棺墓、甕棺墓があります。墓の変遷は、初めに弥生時代中期前半～中期後半(約2,200年前～2,000年前)にかけて甕棺墓が盛んに作られました。続いて後期(約2,000年前～1,800年前)には、甕棺墓に代わって土壙墓、木棺墓、石蓋土壙墓、箱式石棺墓が作られました。写真2は甕棺墓群の様子です。甕棺墓は初め、軸を東西方向に揃えて整然と二列に並ぶように作られます。次に、列に対して横方向や列を構成する墓の横に造られるものが出てきます。最後は、列とならず墓群西側にまとまって作られるようになります。一部の大型甕棺内から、人骨が出土しましたが、副葬品は一つも出土せず、墓の大きさは同じで、墓ごとの優劣はありません。

後期には、墓地は3つのまとまりを形成し、各墓は軸を東西方向に揃えるか直交方向に作られます。

後期後半には、写真3のように、手の込んだ構造の石蓋土壙墓、箱式石棺墓が作られ、棺内に赤色顔料が塗布される群と土壙墓しか作られない群があります。また副葬品も鉄製品（摘鎌）やガラス小玉・ヒスイ勾玉（写真4）などが一部の墓で出土します。

さらに写真3の群では、墓群を覆う盛り土が一部で確認され、墳丘状の高まりがあった可能性もあります。前段階の甕棺墓に比べ墓数は大きく減少し、墓群ごとに墓の種類、副葬品、墳丘の有無に差が現れます。これは、墓を作る人が限られていることと集団ごとに階層差が現れたことを示しています。

古墳時代前期には写真5（1号墳）のように、方形に周溝を巡らせて、墳丘に低い盛り土をした古墳が3基作られました。大きさは周溝内部が1辺7～10mで、高いもので墳丘の高さは約1mとなります。

墳丘のほぼ中央では、割竹形木棺直葬の埋葬施設が見つかりました。副葬品は、1号墳の棺内から鉄製刀子、管玉・ガラス小玉が出土し、盛り土内から袋状鉄斧が出土しました。構造や副葬品から、古墳は小地域の首長の墓と推定されます。

瑞穂遺跡で確認された墓地は、弥生時代中期前半の墓形成から古墳時代前期の古墳築まで非常に長期間にわたって継続しており、墓の構造や墓地の構造の変化を具体的に見ることができます。さらに、弥生時代から古墳時代にかけて地域の集団のあり方が変化し、身分差や権力者が現れていく過程を追う研究のための重要な資料といえます。

また、各時代の墓は、以前の墓を壊さずに作られており、先祖達の墓を大切に守る気持ちや地域にとって大切な場所であるという記憶が後世に伝えられ続けたことが想像されます。



写真2



写真3

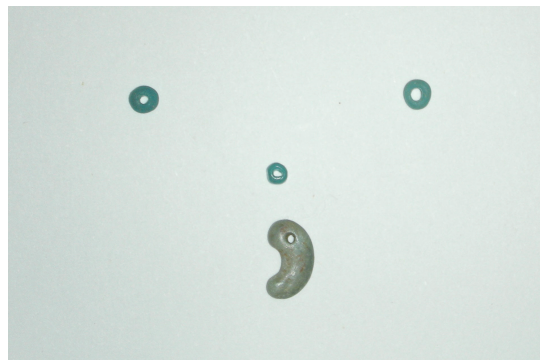


写真4



写真5